≪座談会≫

同志社における キリスト教主義教育

出席者（ABC順）

女子大学教授　有賀のゆり
大学文学部教授　オーテス・ケーリ
女子中・高教諭　鎌谷襄
商業高校教諭　中村幸久
大学文学部教授　岡満男
女子大学総務部長　山本文雄
（司会）　遠藤彰（大学宗教部長）

遠藤（司会）同志社時報は前二号（49号・50号）において「同志社におけるキリスト教主義教育」についての特集をいたしましたが、今回はそれをうけて総合的な座談会が計画されました。お話しいただくテーマとしては、司会者として三つのことを考えております。一つは創立いらい百年の同志社におけるキリスト教主義教育の評価、第二にその現状の検討、第三に将来への展望についてであります。御異存がなければそういうことで順を追ってまいりたいと存じます。

百年の評価

遠藤　新島先生いらい今日まで百年の間、同志社の教育はキリスト教主義の徳育を根本としてやってきたわけでありますが、そのキリスト教主義の徳育とはどういうものが考えられたのか。どういうところに特色があったのか。また百年の歴史の過程の中で、当初の目標の維持や実現の努力において所期のごとくいかなかった点があるならば、それはどういうことであったか。これらの点についてポジティブな評価とネガティブな評価の両方にわたってお話し合いいただきたいと思います。どなたからでもどうぞ御遠慮なく……。

それでは呼び水のような意味で二、三のことを申させていただきます。同志社百年という場合、その源流である新島先生の掲げられたキリスト教主義教育の理念の検討から話を始めなければならないだろうと思います。それはどういうものであったかと考えますと、三つばかりのことが胸に浮かんでまいります。第一には、先生は明治初年の封建的国家主義体制と和魂洋才的西洋科学技術輸入の風潮と射利求名的実利追求の世相に対して、新

心を持つ新人新民の育成を主張したわけですが、これを達成せしめるものは、「上帝を信じ真理を愛し人情を敦くする」キリスト教主義の徳育を根本とする教育であると考えられたこと。

第二には、こういうキリスト教主義に基づく徳育というものは、教会の、あるいは外国ミッションの伝道方策の一環としてではなく、一つの独立した学校教育の形態をもって達成されなければならない、こういう点ですね。新島先生の同志社教育においては、教会との連携はもちろん密接であったのですけれども、教会やミッション・ボードの支配をうけて、その伝道方策の一つのブランチとして行う教育ということではなかったわけです。相互に連携協力しながら、しかも同志社は独立した教育機関であるという点、学校教育においてキリスト教主義的新人新民の実現が目ざされたということ、こういう点だと思うのです。

遠藤　彰氏

第三のことは、先生の私立大学論との関連ですが、右のような独立自由な新人新民の育成ということは、これは帝国大学のよくなしうるところではなく、私立大学、とくにキリスト教主義私立大学によってこそはじめて達成されうるところである、という理論であります。帝国大学や国公立学校が不要だということではなくて、それらの存在理由を認めつつも、なお先生の標榜された教育理念というものは、やはり私学をもって行うのが最も適当であるということであった。こういう三つの点ですね。以上は、明治十五年の「同志社大学設立之主意之骨案」、十七年の「同志社大学設立の主旨」、さらに二十一年の「同志社大学設立の旨意」に繰り返し強調されている点でありますが、明治八年の創立当初からすでに先生の教育理念はいま申しました三点に基づいていたものと思います。

これが同志社百年のスターティング・ポイントだと思います。これが、爾来百年の間どうであったかという問題につながりますが、その点をも含めて先ほど申しましたように、ポジティブであれ、ネガティブであれ、評価、御意見をお聞かせ願いたいと思います。

ケーリ　これはいずれも、ちょっとアメリカくさいものですね。

遠藤　どういう意味ですか。

ケーリ　自由と独立というのは、アメリカの建国の時の旗印ですし、私立大学というものも結局アーモスト初め、イースト・コーストやアイヴィ・リーグの諸大学を見て、発想しているんじゃないかと思います。二番目もアメリカ式な考え方ですね。そういうミッションのブランチとしてじゃなくて、それとしての性格なり、ものを養っていく機関であるべきで、それとしてのクオリティーというものをもつべきであるという新島先生の考え方も、アメリカ式と言ったら言えるのではなかろうかと思います。ほめているつもりはなく、かえってけなしているかもわからないですけど、いずれにしても明治のあのころとしては、そとからの発想とは言えるんじゃないでしょうか。

鎌谷　やはり、新島先生がアメリカへ渡っ

中村　幸久氏

て生活し、学ばれた当時のアメリカの時代的背景というものが、ひじょうに反映されているようなところがあると思いますね。独立戦争が終って、自由、解放、独立といった新しい気風がアメリカにはみなぎっていたようですし、そういうときに向こうで実際にそれをはだで感じ、また私学であるアーモストで学ばれ、あるいは教育を受けられたというところから、新島先生の思想にアメリカの教育、あるいは当時のアメリカの思想というものがひじょうに強く影響していったんじゃないですか。だから当然のようにも思えますし、それがそのまま同志社という私学の教育方針に取り入れられたともいえるでしょう。当時の日本にしては、ひじょうにざん新なものがあったと思いますけれど、ケーリ先生が言われるように新島先生の考えがアメリカ的なものであるといえるでしょうね。

中村　いま遠藤先生がひじょうに要領よく三つにまとめられたんですが、第一の点の新しい人の形成ということ、竹中先生の論文（「同志社時報」No. 49/1978）にもちょっと書いてありますが、この点ではたしかに評価されるべきであると思うんです。しかし、私が気づくのは、明治時代のほかのものとの、とくに文学なんかとのかかわりを見ているとき、やはり新しい人の形成すなわち、その近代化につきまとうところの苦悩というか、そういうものを予見していなかったように思うのです。新しくする、近代化することはいいという、そういう形で進んでいた点があるんではないかということを思うんですが。

岡　新島先生がですか。それとも当時の一般の風潮としてですか。

中村　いいえ、同志社の歩み方の中にです。それから第二の点ですが、それは他のミッションのブランチとしての学校なんかと違った特色だけれども、その点がいまの同志社にひじょうに問題を投げかけていると考えられます。つまり、同志社のキリスト教は何をしているかという批判に対し、すっきりした形でそれに回答することができないという形であらわれている。これはほかのキリスト教の学校と比べたときにはっきり出ているように思います。この問題は、やはりひじょうに大きな課題として同志社に残されたもので、今後、になっていかなければならないし、また、大切な基本点ではないかと思うんです。

遠藤　先ほど岡先生の御質問にもありましたけれども、新島先生自身の新人新民の理解というものと、それ以後の同志社の歩みの中でそれがどう受けとめられてきたかということを、もうちょっと明確に区別していただけませんか。岡先生の御質問によって、中村先生は「同志社の歩みの中で」と言い直されましたけれど、私はスターティング・ポイントのところから御検討いただきたいと思って、新島先生の理念というか、その掲げられたスローガンですかね、そういったものを最初に取り上げていただこうと思って出したんですが……。前号に杉瀬祐先生が書いておられますね。新島先生の理解された近代的市民の理念が、現在問い直されるべきではないかとい

うようなことを……。「新島の近代的個人は、宗教的であり、理想主義的であったといわねばならない」と。（「同志社時報」No. 50/1973, 12頁）それが百年を通して、今日どうであるかということですね。

岡　明治の近代化というのは、ひとことで言えば日本を西欧化することだったわけですね。それはあらゆる面にわたって、技術的にものごとをとらえ、まったく形の上だけの近代化を果たしていく。その中でいまおっしゃるような市民意識というものは、封建社会のまま近代化から取り残されていきますね。

新島先生は「同志社大学設立之主意之骨案」を明治十五年に出されていますが、その時代は、今申したような技術的な近代化が急速におしすすめられた時代ですね。その中で教育制度は、明治五年の学制布告からはじまって、明治十年の東京大学開学というふうにしだいに整備されていくわけですが、一貫して政府が考えた教育、特に大学教育は、男にとっては立身出世主義教育ということが大きな流れだったといえます。明治十九年の「帝国大学令」を見ても、「帝国大学は国家の須要に応ずる学術技芸を教授し、その蘊奥を攷究するを以て目的とす」とあります。これは国家が必要とする学問技術を教えるということで、立身出世につながることだといっていい。一方、女性にとっては良妻賢母主義教育ということが大きな流れでしたね。

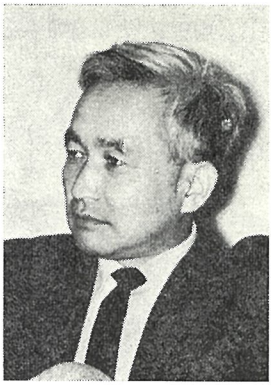
鎌谷　襄氏

そういった教育と技術的な面のみに狂奔する近代化の夜明けの姿を新島先生がまのあたり眺めて「西洋百般の技芸に通じても、私利私欲の奴隷になっては早晩腐敗におもむく」という意味のことを言っておられますね。それが新島先生がキリスト教主義教育をとられた背景じゃないかと私は思います。明治初期の、いわゆる新知識の中には、新島先生に限らず、日本の封建的な殻からぬけ出す脱出口といいますか、そういったものをキリスト教に求めた人が多かったことは事実ですね。そういう背景の中でキリスト教主義の同志社大学が誕生したということは大きな意味を考えなければいけないと思います。

山本　先ほど中村さんが言われたことがわからなかったんだけれど……。

中村　ちょっとあいまいな点は私自身の中に残っているんですが。たとえば、夏目漱石の文学なんかにあらわれているような、近代人として生まれるための苦悩というようなものが、新島先生の書かれたものを読んだり、あるいはその後の同志社の歴史を見たときに、どうも希薄ではないか。まったくないとは言わないが、強烈な印象として残っていない。基本的には新島先生の新しい人の思想というものは、福音から出てきた問題ですから、つねにそういうものの反省の中で生まれてきた。だからそのような苦悩というものはあることは確かなんですが、なお私は希薄に感じられる。そういう意味なんです。

遠藤　たとえば近代化とは、あるいは近代人として誕生するということはどういうことなのか、それをおっしゃっていただくと一層はっきりするんじゃないでしょうか。そうすると、それに伴う苦悩というのがわかってき



山本　文雄氏

ますね。たとえば、漱石の場合の苦悩というのは何から起こっているのか。何を目ざし、そして何に阻害されることによって苦悩が出てきたか。

中村　自我の確立という問題じゃないでしょうかね。

遠藤　そうすると、その点は漱石は必ずしもキリスト教によってそれを示されたとは思わないけれども、新島先生はキリスト教から源泉を得ている。ケーリさんが言われたように、先生はアメリカに渡って当時のニューイングランドに生きていた清教徒的人格主義的な自覚に達せられたのでしょう。ところがそれが何によってどのように阻害されたか。そのことで先生に苦悩というものが生じるという、そこら辺のことはどうでしょうか。

中村　ちょっと、先生の言われる意味がもうひとつわかりにくいんですが。

遠藤　自我の確立ということは近代化の一つの大きなモメントですね。新島先生の場合それは清教徒的人格主義的人間の自覚であったと思いますが、それがのちの「独立自由の新人新民」の思想となる。しかしこのような自覚を阻害する要因が当時の日本の社会には存在したわけですね。封建道徳、立身出世と射利求名の風潮、国家主義、天皇制、科学主義等々。のちの漱石もこういう阻害要因に囲まれつつ自我の確立のために苦闘したわけだけれども、新島先生の場合もその戦いは漱石ほどに鮮明ではないかも知れないけれどもやはり存在したのではないでしょうか。

中村　漱石にあって、新島先生になかったものですね。これは阻害の要因ではないのですが、最初にケーリ先生のおっしゃったことと関係してくると思うんです。つまりアメリカ的な楽天主義というんですか、そういうものが新島先生自身の側にあったんじゃないか、それが阻害要因を包みこんでしまった。言いかえれば日本人一般、庶民とかけ離れてしまった、と言いうるのではないでしょうか。

ケーリ　新島先生のいう独立、自由というのと、現代人の独立、自由というのと、幾らか違うんじゃないかと思うんです。独立と自由というのは、新島襄が言う場合には必ずキリスト教の人間観が裏にあるんで、襄先生の書いたものをいろいろ読んだりすると、国境をこえて、特にハーディー家との関係において……。何かそういうものを、ビンビンと響いて感じるわけです。キリスト教の人間観が絶えず頭にあって、そしてそれで自信満々なんですね。それはクローズアップすると新島先生の場合アメリカ人が主なんですけれどもそれは、人間だれであってもいいわけなんですね。それが絶えず働いているというふうな感じを受けるんです。その上に立った独立と自由な人間をつくりたかったのですね。もうひとつ上手に表現できないんですけれど。

山本　新島先生が封建社会で育っておられて、アメリカへ行かれた。ところが当時のアメリカと日本というものは、いま以上に対比的なんです。文化の点においても、白と黒のように違うわけですよ。そこで新島先生はアーモスト大学で教育を受けている中に、アメ

リカの文化というものに魅せられて、批判するよりもとり入れるのにいっぱいで、そしてこれはオーソドックスな考え方かもしれないけれども、その文化の根底にあるキリスト教というものに、やはり目が向いていった。だからして、そのキリスト教を根底にしながら文化の華が咲いているんじゃないかと、思われたと思うんです。そして日本においても、ただ表面の文化だけじゃなしに、精神文明というものをどうしてもやらなければいかん。そこで、教育とか学校というものが必要であると思われた。新島先生は資本主義を批判しアメリカ文化を批判していこうというような余裕もなかったし、ほんとうにアメリカに魅せられたというか、そういう気持で日本に帰ってこられたと思うんです。

オーテス・ケーリ氏

だからアーモストの教育というのは、先生にとってはほんとうに理想のように思えて、それを日本に持ってきて、やろうとされたんじゃないですか。新島先生の発足当時のその考え方は立派なものなんです。同志社百年の歴史の中にはいろいろな時代があるわけで、その時代時代に生きた同志社人が、はたして新島先生のほんとうの初期の精神を持続していたかどうか。初期の新島先生の精神そのものはぼくはすばらしいものだったと思うし、その精神を、やはり時代時代によって表現のしかたを変えてこなくちゃいけない。この点、後世の同志社人は、大いに反省する必要があるんじゃないですか。ぼくはそういうように思うんです。

遠藤　新島研究というものが、今までいわば客観的実証的方法をもっては十分なされてこなかったうらみがありますね。少なくとも和田洋一教授の「新島襄」（一九七三年）までは。たとえば先ほどの個人の自覚の問題にしても、新島先生はどのような思想史的関連をもって発想しているのか。岡先生の言われたように立身出世や良妻賢母主義というのは、当時の封建制の中での教育理念ですね。そういうものとの戦い、またその超克としての新人の思想というようなものがどのようにしてできたのかということですね。あるいは、新らしい近代日本形成の初期、東大が創立されついで帝国大学令成立に伴って次々に国家須要に応ずる学術研究の機関としての帝大が設立され、明治憲法が発布され、教育勅語が出された時期、そういう天皇制を中心にした近代国家の形成が着々進められていく時期ですね。そんな状況との関わりの中で、先生はどういうことを考え、どのような思想形成を行い、そして同志社設立によって何を世に提供しようとされたのか。そのような当時の社会歴史的状況との関連における新島研究はあまりなかったわけです。これは私は大へん大事なポイントだと思います。新島襄だけを歴史的関連の脈絡からスポッと抜き出して、ただ新島先生新島先生というのは妥当なやり方ではない。先生の歴史的位置づけが大切だということです。そして現代の同志社のわれわれもまた、同様にいろいろな歴史的状況に関わりつつ生きているわけなので、そのような新島研究や立学の精神の検討は、現在の同志社に重要な指針を与えることになると思いま

す。

先ほどのお話にありました市民意識とか近代人の自覚とかが、明治の初期にどのように形成されつつあったか。それとの関連においてどこに新島先生の独自性があったのか。アメリカで学んできたものをただポンと出したということであったのか。日本の状況とは切り結ぶところのない楽天性が土台となったものだったのか。キリスト教はどういう形で彼の教育理念形成の動力となったのか。というようなことですね。これらのことを解明する総合的な努力が必要ではないでしょうか。中村先生の出された問題のモチーフも、そういうところに触れるんじゃないでしょうか。

有賀　岡先生がおっしゃいましたことは、私ひじょうに大事なことだと思うんです。それは同志社のキリスト教主義教育というものが、官立の学校とどう違うかということをズバリと言ってくださったわけで、それが建学の思想であって、またそれは、現在の同志社にも生きていなければならないんじゃないかと思います。じつは今日、私は女子のほうを代表して発言せよということでしたので、ちょっと「同志社九十年小史」などをひもといて勉強してまいりましたのですが（笑）、私自身も驚きましたのですが、新島先生は初めから、女子の教育をとくに良妻賢母教育にしていらっしゃらないわけなんですね。初めからやはり新しい自由な女性というんですか、男子と平等の権利を主張するような女性をつくりたいということをおっしゃって、お亡くなりになるひと月ほど前に、遺言のように話していらっしゃることばがございますんです。

つまり「いままでの女学校の卒業生は、無学の女の人と同じように、卒業してしまうとすぐに男子、つまり夫の圧制を受けて、せっかく勉強したことを何にも役に立たないようにしてしまい、そして学校で習いもしなかったような家庭の雑事の中で朽ち果ててしまうことが多い。それはひじょうに残念だ。文明にとってはたいへんな損失だ。だから女子はもっと女権を拡張して、社会改造などに働いてほしい。本来女性というものは、そういう社会改造とか社交のことなどに、男子よりも勢力があるのである」というようなことを言っておられる。勢力はつまり、影響力ということだと思うんです。「それでまずあなたに頼みたいのは――佐々木豊寿という人に言われたらしいんですけれども――女学校の生徒の人権を重んじてほしいということと、慷慨心を起こさせることだ」というふうなことをおっしゃっておられるのです。慷慨心というのはどういうことでしょうか、正義感ということでしょうか。この時代は、もうすでに「新しい女性」とかいうことがいわれた時代ですか。

岡　「新しい女性」よりは、だいぶ前の時代ですよ。

有賀　前ですね。だから、ひじょうにそういう点で進歩的であったと思うんです。創設期からの教科なんかを見ましても、それがわかります。現在の女子中・高の前身でありました同志社女学校の普通科ですが、名称はい

有賀のゆり氏

ろいろ変わりましたね。

山本　はじめは同志社分校女紅場ね。

有賀　そうそう、初めは二人ではじまったんですが、初期のカリキュラムには、お裁縫以外には、当時の府立女子校の前身で教えられていた、いわゆる女性向きの花嫁修業的な教科がはいってないんです。新島先生は人間の教育として、男子も女子も平等な立場からはじめられたということがわかって、私ひじょうに感心しました。

直接その影響かどうかはわかりませんけれども、明治二十七年までの卒業生の進路状況を見ると興味深いデータが出ております。女子部がちゃんと発足したのは明治十年ですね。それ以前は微々たるものだったようです。それで明治二十七年までの卒業生というと発足以来十七年か十八年しかたってないわけですね。その間の進路状況が、結婚した人が四十六人で、その中で教役者、つまり牧師とか教師の妻になった人が十六人おられる。それから未婚者というのがひじょうに多くて驚いたんですけれども、七十人もいられるのです。その中で教育事業にあたっている人が二十九人、伝道にあたっている人が八人、それから看護婦の仕事をしていられる方が二人、さらに勉強していられる就学中という人が十七人ですね。ですからひじょうに多くの方が、社会でキリスト教的な仕事をしていらっしゃるわけなんです。これはいわゆる普通部の卒業生らしいんですけれども、ですから就学中というのはその上さらに外国へ行ったり、あるいは国内で勉強していらっしゃることです。これをみましても、発足後間もない明治のころの女子の同志社卒業生の意気込みというのは、すさまじかったんだなと思うんです。

岡　満男氏

それが一時、明治の終わりごろですか、女子部がひじょうな危機に瀕し、また大正時代になって盛り返しまして、大正の末期から昭和の初めにかけては、女学校と専門部の二つのパートがどちらも充実して、人数もひじょうにふえて盛んになるんですけれども、もうその時代になってきますと、だいぶ学校の雰囲気が変わってきているようなんです。どちらかというといわゆる良妻賢母型になってきている。これもおもしろいなと思いました。

私ども学内で教育にあたっている者としては、女子の学生でも男子と変わらず、ほんとうの意味でそれぞれの個性を伸ばすようにつとめているつもりなんですけれども、案外、現在における同志社の女子教育の社会における評価はどちらかというと良妻賢母型だと思われているんじゃないでしょうか。

岡　さあ、どうでしょうね。それは。

鎌谷　一言で片づけられないでしょうね、良妻賢母という言葉でね。

岡　それと、良妻賢母の意味もだいぶ変わってきていますよ。

鎌谷　時代が変わってきたということですね。さっきも山本先生が言われたように、新島先生は当時の女子教育についても、しょっ中、アメリカの女子教育の例を引用されていますし、初期においてはそれなりのひじょうに強い期待もあり、意気込みもあったと思われますし、女子教育にそれなりの意味もあっ

たと思うんですね。それがやはり時代の推移とともに、さっき岡先生が言われたように、良妻賢母という意味もだんだん変わってきて、時代や社会が変われば、その意味も変わってくるでしょう。

岡　いま有賀先生のおっしゃったことを私はひじょうにおもしろく聞きました。先ほど山本先生がおっしゃったことにまったく同感なんですが、同志社のスタートの時点で、新島先生は、日本人の近代化ということについて、とくに精神的な面をひじょうに意識されていたのではないでしょうか。その手本がアメリカに求められたということは当然でしょう。今日のように国際交流が盛んにできる時代じゃございませんからね。山本先生のおっしゃるとおり、また先ほどケーリ先生がおっしゃったように、新島先生の考え方がアメリカ的だったのは、そこに新知識を求め、生活し学んだ者として当たりまえのことだと思います。これは明治の初めに近代意識を持とうとされた先人たちの中で、新島先生以上に広い視野で近代化ということを考えた人がはたしていたでしょうか。鎖国から解放されたばかりで、それは不可能なことではなかったでしょうか。

そういった出発点での姿勢というものは、その後の同志社の歩みの中で形骸化してしまったといえますね。これは一つには同志社内部で、新島先生というものをひじょうに神格化してしまう。言ってみたら、仏教徒が「なむあみだぶつ」と唱えたら極楽浄土に救われるというお題目のような存在に新島先生をまつりあげてしまったということが、私はあると思う。

それからいま一つには、その後の日本の近代化の歩みがどういう方向をたどったかという点とかかわっていると思います。日清・日露戦争に勝った日本はひじょうに自信をもちますね。その自信がさらに一段と富国強兵につながっていく。大正のある時期、近代思想が奔流となってはいってきますけど、結局それもほんのわずかな時期で、思想弾圧、そして日本の不況の打開を大陸侵略に求めていく。いわゆる軍国化の時代を迎えるわけでしょう。そういう中で同志社というものが生きていくためには、他からの外圧に対してやっぱり弱い面も出てきたし、それがまた内部の形骸化をいっそう促していくという面が、多々あったように思いますね。やはり日本全体の時代の流れの中で把握しないと、同志社だ

けの問題ではなかった面を考える必要があると思います。とくに昭和にはいってからの日本の教育というのは、まったく学問の自由などは名のみで、どこにも自由はなかったわけですね。これは同志社だけが自由に生きようとしても、生きられない時代でしたよ。この点は同志社の教育ばかりでなく、日本全体の教育の問題として、今日深く反省しなければならない問題ですね。

中村　いま岡先生や遠藤先生がおっしゃったことも含めて次のように言えるのではないでしょうか。新島先生の教育理念はたしかにすばらしいものであったし、個人的にわれわれは尊敬すべきであるし、また尊敬している。しかし今まで述べられてきたような歴史的、時代的な制約の中でのことであったという点を、見落としてはいけないんじゃないか。

岡　見落とすと、神格化につながりますよね。ただね、新島先生は明治二十三年一月二十一日の遺言の中で、「同志社の社員たる者は生徒を丁重に取り扱うべきこと」を言われていますね。もう一つ、「倜儻不羈なる書生を圧束せず」ということ。また、学校の経営が機械的に流れることもひじょうに戒しめておられます。この遺言の精神を、その後今日にいたるまで同志社人が自分の心としてきたか、きびしく問いかける必要がありますよ。こんな立派な遺言を残している教育者は日本でも新島先生ただ一人だと思いますね。その遺言を、その後の同志社人が生かしていない。残念なことですが。これは今日われわれ同志社の教壇に立つ者は、みずからの心にたえず問いかけていく必要があるのではないでしょうか。

遠藤　新島先生からはじまって、百年についての評価をお話いただいたわけですが、新島先生を歴史状況から抜き出して、切り離して考えることは神格化につながるという御指摘がございました。これは心すべき点だと思います。最初に私、三つのポイントを申し上げた点も、いろいろな状況の中で新島先生が、デヴィス先生や山本覚馬氏その他の方々とともに考えながら形成していかれた理念だろうと思いますが、その場合に、やはり当時の明治初期の社会状況、思想状況、政治状況など、そういったものとの関連で新しく見直していくということが、今日のわれわれの、同志社百年に対する批判的評価の立場をつくってくれる大切なファクターじゃなかろうかと思います。

新島先生いらい今日まで、同志社は精神的にも思想的にも、あるいは政治的にも財政的にも、波乱万丈、紆余曲折を経てきておるわけですが、そういった一つ一つの時代状況の中に同志社の歴史を批判的に捉えるために、新島先生が先生自身の状況の中でどのように理念形成をやり、また学校の創設と運営をされたかという事実の把握を基盤にすることが大切なことであろうと思います。そのための努力や検討や研究が百周年を前にして総合的に行われる必要があると思うのです。

現状の検討

この辺で現状の検討に移りましょう。いままでのお話の中にも現状に対する検討批判という面が出ておりましたけれども、この点に集中してお願いしたいと思います。

「時報」（49号・50号）に書かれました先生方の文章は、だいたい現状の分析や検討、あるいは苦悩や疑問、もしくは希望や注文、そういったことに集中しておったように思いますが、ここら辺のことはどうでしょうか。

中村　時報を読んでいても感じることですが、大学と中・高とで事情が違いますね。大学のほうは、伝統的な形式の中でのキリスト教主義教育ということを考えたならば、もはや絶望的である。中・高のほうは、そういう中でこれからどうしていけばいいかという中にある。そういう大きな違いを感じるんです。

遠藤　大学のほうは絶望的だとおっしゃいますが、どういう点でしょうか。

中村　形式的、伝統的な、そういう形のワクの中ではということです。

遠藤　形式的、伝統的というのはどういうことですか。

中村　たとえば、週のきまった時間に全学生を相手に礼拝をするとか、あるいは新島先生が遺言に言われたように生徒一人一人を伝統的形式の中で大切にするといったようなことです。実際ぼう大な数の学生がいて、そういう形ではとらえていくことができないという状態になっているんじゃないでしょうか。

山本　現在御存じのようにキリスト教界は、ひじょうに思想的な統一というのがないわけで、いろいろな考え方があって混乱しておりますね。日本キリスト教団も混乱しています。神学部の先生たちの中にもいろいろの考え方がある。大学の宗教部の考え方も、従来のオーソドックスな――何がオーソドックスだということは問題になるけれども、いわゆる伝統的な形の礼拝を守り、讃美歌を歌い、祈りをすることに対して、否定的ではないのでしょうか、そのように受け取られる。けれども、中・高は、やはりきまった時間に礼拝をし、讃美歌を歌い、クリスマスもし、キャンドル・サービスもしている。そういう中でキリスト教の本流を探っていくというか、またキリスト教の本流に学生たちを触れさすという、そういうものをひじょうに大事に守っていこうとしていますね。ところが大学はもうそうじゃない。中・高はそういう伝統的なものの中に求めていこうとするし、大学は違うわけです。そういう面が大学と他の諸学校との対比的にぼくには映ります。

中村　私が言った「絶望的」というのは悪い意味じゃなしに(笑)、いい意味では、伝統から解放されているのかもわかりませんね。

鎌谷　いま形骸化ということから、何とか模索しながら抜け出そうとしている、そういう姿勢は見られるんですけれども、やはり中・高、それから大学も、何かそれぞれ一生懸命に宗教教育、キリスト教教育をやらなければならんという使命を感じて苦悩していることは、読んでわかりますね。何といいますか、すべてのことがあまりに分業化されてきて、もっと全同志社的な、同志社全体で考えていかなきゃならない、そういう一つの作業といいますか、具体的な問題に対しての……。そういうことの必要性を強く感じますね。

そういう意味で、ぼくはなぜこういうことになったのかということを考えるんですが、同志社の組織とか運営とか、いろんなことがからんでくると思いますけれども、だれかが「時報」にも書いておられたと思うんですが、やはり戦後新しい学校制度の改革にともなって生徒数がどんどんふえてきて、同志社は経営の面でも独立採算制をとってきたわけですが、それのいい面と、またマイナスの面も現在出てきているんじゃないかと思うんです。経営上やむをえなかった事情があったと思うんですけれども、同志社全体の教育面からすれば、ひじょうに欠陥があらわれてきているんじゃないかという感じをもつんです。それぞれ自分たちの学校のことや教育につい

ても、キリスト教教育についても関心があり、何とかしなければならんということで一生懸命になっておるんですけれども、それは同時にほかの学校のことや同志社全体に対しても関心が薄くなってきている結果にもなってきますし、いまの商高の問題でも、やはり独立採算制の問題と、それから連帯意識の欠除といったようなものをぼくは感じます。だから、同志社はただ理事長や総長をはじめ、ごく少数の人たちの教育方針や教育理念だけに頼っていてはいけないと思いますし、全体的な意識に教職員がめざめなければならないし、一つの目的に向かっていくような方向に努力がなされなきゃならないと思うんですが。まあ独立採算制の問題は簡単に論じるわけにはいかないむつかしい問題ですが、少なくとも、何かそれによって起こっている欠陥というものを何とか補うとか、改善するとか、そういうような努力がなされなければならないと、ぼくは思うんです。

もちろん、各校の独自性というものは尊重しなければならないわけですけれども、組織の面からも、運営の面からもこのような欠陥を補うようなものがないわけですね。ときどきこういう話し合いがなされたり、「時報」で取り上げられていろんな立場から書かれたり、キリスト教教育委員会というものもありますけれども、何かたまに顔をあわせるというようなものですし、もっと同志社全体の連帯意識を求めていく、教育共同体としての役割が必要なのではないかと思うんです。キリスト教主義教育についても、いろんなことが話し合われて、いろんなプロジェクトも考えられたり、またいろんな批判やら反省はいつもなされるんですけれども、それじゃこれからどうしたらいいかという具体的な案ですね、そういうものがなかなか出てこない。もっとそういう方向に向かって動かなきゃならんのじゃないかと思うんです。

遠藤　いまおっしゃったことには、一つは現在の同志社の制度や機構が、キリスト教主義教育というものを生かすふうになっていないということ、これが一つありますか。

鎌谷　はい、そうですね。

遠藤　同志社ではキリスト教主義というものが徳育の根本であるというふうに標榜されているにもかかわらず、それに見合う組織なり機構なりが十分整備されていない。財政的な裏づけもきわめて乏しい。人材の活用も十分ではない。とにかく立派な看板を掲げていても、実行がしにくい条件のままでは困るわけです。そういうことが一つ。

それからキリスト教主義教育というものを、全学園あげて考え、また実行していくための精神的な連帯が十分でありませんね。学校法人の当局の人々も教職員も、同志社教育の根本についてはいつもツーカーで通じ合える状態でなければならないのに、現状はかなりほど遠いということですね。

さらに、キリスト教主義教育のみにとどまらず、いま独立採算制の問題を例にあげられましたけれども、学校の経営は全体として、同志社教育が所期の目的を達成することを根幹として遂行されていかなくちゃいけない。この三つばかりでございましょうかね。

鎌谷　そうですね、まとめていただきまして……。

山本　「時報」を見ますと、大学も中・高の先生方も同志社の現状を憂え、これではいかんということを、具体的な例をあげて指摘しておられるのですから……。

鎌谷　これからそれをどうしたらいいかと

いう、建設的な何かがやはり生み出されていかなければならない時期ではないかという感じをもっているわけです。具体的にどうしたらいいかというのは、やはり絶えず話し合っていかなければならないし、そういう共通の場がほしいなあということは感じますね。

有賀　そういう風に、共に同志社の教育を話し合える場のために、経済的な裏づけもほしいと思いますね。

鎌谷　あまり精神だけが強調されて、それがやはり形になってあらわれないような感じも、もたないわけではないですね。

有賀　現在の同志社のあり方を見ますと、収支が償うことでなければ何も計画できないし、何もできないというような方向に行っているように思いますので。

鎌谷　だから経営主義だという批判が起こってくるのも当然ではないでしょうか。

有賀　更に、ますますそうなるんじゃないかというおそれがあるわけですね。結局、利益の上がることと、能率というか、機能性というか、そういう面を促進するものばかりが優先されることになります。ところが、本来キリスト教の要求することは、与えることであって、もうけることじゃないんですから、それをやっぱり念頭に置いておかないと一番大切なものを見失ってしまうと思うのです。

新島先生は同志社創立の初めから「良心を手腕に運用する」人を養成するということを言っていらっしゃるわけで、そういう人を社会に送り出すということは、つまり同志社が社会の良心にならなければいけないということを言っていらっしゃるんだと思うんですけれども、それには、ある程度同志社が犠牲を払っても、社会のためにこれはどうしてもやらなくちゃならないということがやれるようになる設備とか、経済的なバックアップとかがほしいなと思うんです。そういうことのための積極的な措置が講ぜられればと思います。

遠藤　現状検討という面からいえば、裏返していえばそういうことがまったくといいますか、足りない。

有賀　同志社の各校がそれぞれ必死で、独立採算制であがいておりまして、そういうふうに、ほんとうにいいことだからやりたいとわかっていることでも、できないことがたくさんあると思うんです。だからそれは、同志社という名のもとでやれるような……。

遠藤　財政的にも機構的にも、裏づけがひじょうに乏しいということですね。

先ほど岡先生から、新島先生の掲げられた理念というものが形骸化してきているということを指摘されましたが、現状においてそういう点はどうでしょうか。学生生徒を大事にするとか、その他遺言にありましたようなことは、今日はほとんど地を掃っているというふうな御発言でございましたが、そういう観点からどうでしょうか。

鎌谷　これだけ学生数がふえると、やはり機械的に流れやすいということは、そのとおりですね。だから学生を少なくしたらいいという、すぐそこへ結びつかないし、そういう現状の中で、この欠陥をどう補っていったらいいか、といった点を……人格的な接触を学生たちともてるような、そういう工夫や努力がやっぱり積極的に考えられなければならないんじゃないかということを感じるわけですね。それと、宗教教育というものは、はいってくる学生だけを対象に考えるというだけではいかんと思いますし、やはりキリスト教主義の学校の経営と運営というものがいかにあ

るべきかということも、そういうことと結びつけて考えられなければならないと思うんです。これはさっきの繰り返しになりますけれども、つまり同志社全体の教職員の自からの問題として受けとめなければどうにもならない。でなければ連帯感というものも生まれてこないのではないでしょうか。

中村　私は商高問題を考える中で、ひじょうに極端な考え方に走ってしまったんです。というのはつまりキリスト教主義というものを貫いていったならば、先ほど有賀先生がおっしゃったようにお金のかかることなんですね。そのことを商高問題にあてはめて考えたときに、商高を存続したら同志社がつぶれるじゃないかという論理が返ってくるわけです。つまり、キリスト教主義をできるだけ、極端に言うと最後まで生かして同志社をつぶすか、それとも同志社という学校法人を生かしていくために、キリスト教主義というものをある程度捨てていかねばならない。こういう二者択一の論理、そんな考えになってしまったんです。私は一時期、これは神の同志社に対する裁きだ、と考えました。キリスト教主義を棄てた同志社として生きるか、キリスト教主義というものはすばらしいものだったんだ、そこにあったんだという形で同志社をつぶしてしまうか、どちらかを選ばざるをえない時期に来ているんじゃないかと考えたんです。

ところが、そういう極端な考えはいけない両方生かしていかねばというひじょうに緊張した思いになりました。そういう中で感じたことなんですがあの商高の廃校問題をめぐって生徒と教員の間でさまざまなことがあったわけです。ところがそのときに、いままで教員も殻をかぶっておった、生徒も何か殻をかぶっていたのが、あの問題を契機にして、全部とは言いませんけれども、殻を破って何か触れ合うものがあった。私は、そこにキリスト教主義というものがやっぱり生きていたんだというような、そういうものを見い出したんです。つまり、ああいう危機みたいなところへ追い込まれぬと出てこないようなもの、そういうものがキリスト教主義じゃないだろうか。これは一つの感じみたいなものですが。

有賀　ほんとうにそうだと思いますね。ある意味では、商高を除いて同志社はいま、あまりにすべてが恵まれているのでね。

中村　口では言うものの、さしずめ恵まれているから……。

有賀　ですから、危機感がないから、キリスト教というものの必要性というのか、精神的なものの必要性というものを、みな感じないんだと思うんです。戦争中軍部に圧迫されて、同志社はキリスト教主義を捨てなければならない、つまり聖書の教科と礼拝をやめなければならないような事態に追い込まれたときがありましたね。そういうときに、責任のある立場にあった方々はひじょうに苦悩されて、真剣に祈られ、そして命がけでキリスト教を守ろうとなさったわけです。そういう危機感に近いものを多少なりとも現在の教師が感ずればいいんですけれども、いまは何となしにすべて恵まれていて、どうにかやっていけるものですから、それでかえっていけないんじゃないかと思うんです。やはり宗教的な力というのは、おかしいですけれど、ある程度迫害がないと、ほんとうの意味では生まれないのじゃないかと思います。

遠藤　いまの御指摘は大事な点だと思います。同時に、現在の状況というのはたいへん恵まれて、自由だというお話でしたけれど

も、見方を変えますと同志社教育は違った形でやはり危機のただ中にある。戦時中のような形の危機ではないにしても、社会的、思想的、機構的、あらゆる意味で今日の教育の問題というのは、同志社に限らないですけれども、とくに同志社のように一つのユニークな目標をもって教育をやろうとしている、そういう理想主義的団体にとっては、内外とも危機だという、そういうことを思うんですね。それをやっぱりわれわれ教職員は考えなくちゃいけないと思いますね。そういった中から、中村先生、有賀先生がおっしゃるような真実の同志社教育の理念に根ざすところの教育というものが、学生生徒と教師の間にも、教職員相互の間にも成り立ってくるんじゃないかというふうなことを思いますけど、そこら辺があまりはっきりしないということではないでしょうか。それで、同志社の特色というもの、同志社教育のよさというようなものが、内側からどうもあまり発揚できないでいるという、そういうもどかしさを感じます。ほかの学校と較べてどこか違った点があるんだろうか、どこに同志社教育の特色がはっきり指摘されてるだろうかと考えますとき、大学においても中・高においても、阻害要因が多くてなかなか確信をもって指摘できない。これは同志社教育の危機というべきではないでしょうか。

中村　ちょっと話を戻しますけれども、有賀先生が言われたことに対して遠藤先生が、いや、いまは安定しているんじゃない、危機だと言われましたけれども、それはもっともなんです。しかし、問題は、危機だけれども実際危機と感じていない状態にあるということが問題じゃないでしょうか。それの一つの責任は私たちにもあると思うんです、とくにキリスト教主義教育に直接的に責任をもっている者に。それを同志社の中で、危機だということ、あるいはこういう点があるということについて、もっと叫ばなければいかん。言わなくてはならない。それが何かお互いに、言わないほうが無難だという形で押さえ合っているように思うのです。

私は「時報」の原稿を頼まれたときにも、こんなややこしい商高問題の中でいらんことは言わぬほうがいいと、だからもう、ほんとは書きたくなかったんですよ。だけどやっぱりいかんというので書き、またきょうのこの会でも、できれば黙っていたい。だけどやっぱりあえて言葉が出てくるという気持が私の中にあるんです。実際それぐらいが、今私にできることですから。

有賀　その危機というものが、戦争中はそとからの迫害が主であったわけなんですけれども現在は中から生まれているから、実際にはよけいおそろしいわけです。

遠藤　日常化している。

将来への展望

それでは第三のテーマに移りますがこれからの展望ですね。過去百年の評価、それから現状の検討に基づいて、これから同志社のキリスト教主義教育というものは、どういうことをめざしていけばいいか。もちろんそのお話もいままでの中に出ておりますけれども、主としてその点に集中してお話し願いたいと思います。

岡　さっきのこととも関連するんですけどね。私、新聞社から同志社にかわってまいりまして、新聞社も同志社もある意味でよく似ているように感じます。というのは、あまりにも大きくなりすぎてしまったという点で

す。同志社の場合は、同志社の教育の特色というものが失われがちです。新聞社の場合は、それぞれの新聞社が独自の主張というものを掲げようとしながら、全国紙の中のどの新聞を手にしても大して変わらないということになってしまっている。大学も新聞社も組織が大きくなればなるほど、個性や特色がかき消されてしまう作用をするものだということを感じますね。

それでは同志社をもう一度こじんまりとした形に建て直せといっても、これはもう不可能な話ですね。だからといって、マスプロ教育では特色が薄らいでしまうのもいたし方ないと言いきってしまっていいのでしょうか。いたし方ないと言ってしまえば、そこから何の問題の解決も、私、出てこないと思うんです。とすれば、マスプロ教育の中でなお特色を生かす努力を私どもはしなければならない。それが、これから将来の同志社教育への展望ということにもつながっていくと思います。

将来の同志社の教育という問題から少し離れますが、これからの教育の第一の課題は何かということを考えてみたいと思います。二十一世紀まで残り二十数年の二十世紀のうちに解決のいとぐちをつくって、新しい世紀に引き継いでいく問題として、まず一つは、資源と人口のアンバランスからくる地球の危機の問題があります。それともう一つは、そういう危機を増幅している差別の問題、これが私、あると思うんです。これからの教育の課題は、なによりもまずそういうアンバランスによる危機を是正すること。そのために、あらゆる差別解消の方向に教育を向けていかなければならないと考えます。

これは裏返していえば、これまでは技術がすべてだという教育が行われてきた。とくに立身出世主義の日本の官学教育は、まったく技術万能主義の教育を行ってきたといえますね。そういう過去への反省と同時に、今後はいま申しましたような教育課題と取り組める教育の場が必要ですね。これはやっぱり私、同志社こそ、そういった教育ができる場ではないかと思います。宗教とのかかわりの問題も、ひじょうに大きくなってくるでしょうが、そういう課題に取り組める教育の場に同志社をしたいと思います。

教育というものは、つきつめたところ情熱ではないでしょうか。情熱の一つのよりどころが、同志社の場合はキリスト教主義ということじゃないかと思うんです。キリスト教主義の意味は、教師によってそれぞれ受けとめ方がひじょうに多様だろうと思います。多様は多様でいいじゃないですか。ともかくも、情熱というものを教育に反映させなければいけない。それは具体的には、教師というものの学びつつ教え、教えつつ学ぶ態度に示されることではないでしょうか。それが先ほど申しました新島先生の遺言にある、学生を丁重に取り扱うことにもなるし、倜儻不羈（てきとうふき）な学生を圧束しないことにも通じることだと思います。

山本　横井時雄、宮川経輝、芦田慶治、中島重の諸先生は学生、生徒に何か人間のあり方に強い刺激と転換のモメントを与えている。やはり現在の神学部の先生方、聖書や宗教学を教えていらっしゃる先生方は、ちょっと批判になって申しわけないけれども、単なる宗教学やキリスト教概論を教えるんじゃなしに、同志社で学んだものが、工場で働こうが、銀行で働こうが、あるいは商社で働こうが、そういう場で、パッとよみがえってくるような、強い刺激と転換、人間のあり方と

か、そういうものを四年間のうちでピシッと教えていただきたい。とくに神学部の先生とか、聖書とか、あるいは宗教学をやっていらっしゃる先生方にそれをやってもらいたい。礼拝においてもそういうものをピシッとやっていただきたいというのが私の願いです。そういうものがちょっと最近、遠慮されておるのか、薄まっているように思えます。

ケーリ　よく聞く話で有名なのがあるんです。同志社の学生がくにに帰って、そっちの人に聞かれたそうで、「新島先生をどう考えるか」「いや、私まだその先生にあたっておりません。そのゼミをとっておりませんし……」と答えたぐらい、新島襄が薄れているというふうにつかわれる話なんですね。（笑）

私は、新島先生を偶像化する傾向はひじょうにこわいし、よくないと思うんです。神話とつながりますし、これこそまたキリスト教ではいけないことになっているので、いまどこに納めてしまったか知らないけれど、旧図書館の二階の、上がっていくと閲覧室にはいるところに、新島襄の半身の像がありましたね。あの新島襄は醜い。どこかの社長をえがいているつもりか、堂々と、それこそ三十貫ぐらいある、〝であってほしい〟新島襄なんだね。私が教えられてきた新島襄は小さい人で、わりあいに暗い感じもしないわけでもない人で、またああいうふうに不幸にして早死してしまったような人なので、自分をすり減らしてしまったといってもいいんじゃないかと思う人だったのですね。

今の時代はイメージの時代であり、いまごろの大学生、あるいは中高生、みんなテレビとともに生まれてきて育ってきた連中なので、習慣にしろ、服装にしろ、ひじょうに解放されて自由になってきて、ちょっと宣伝のとりこになってしまっている。そのような中で教育していかなければならないわれわれなんですね。

私はその新島襄のイメージということはちょっと控えておきたいんです。やはり、われわれが何らかの形で大学生活四年の間に、さっきの話での危機感式にといいましょうか、迫る何かがあったところで、ほんとうの人間の心のほうにまで触れることができるような機会を、教室なり、学園なり、寮なり、いろんなところで多くつくらなきゃならないと思うんです。これしかないんじゃないかと思うんです。それは金ともそう関係ないし、このようにはでなセーター着て学園を歩き回るのも一つの方法かもわからないけれど、何であんなふうにしているのかというふうなところが、一つきっかけになるかもわからないんです。そういうふうに、ショック時代ですから、ショックを与えて、それをいいほうに、あるいはもっと深く利用して回転していかなければならないんじゃないでしょうか。われわれに残されているのはこれぐらいしかないんじゃないんですか。

それはどこででもできるじゃないか、同志社じゃなくちゃだめなことはないじゃないかと言われますかもわかりませんけれど、しかし、それはそのうちにまたこの地、この私らがいる同志社という定型の中に結ばれて、縛りつけていくことができたら、ベストじゃないかと思うわけです。何かちょっと、わかりにくいかもわからんですけれど、何よりも人間同志の触れ合い関係の大事さが教育ではないでしょうか。

有賀　大学というところは、だんだんと程度が高くなっていくに従ってひじょうに専門的なものを求められてきて、またすべての学

問がひじょうに分化しておりますから、何もかもが一般の人にはわかりにくい、専門的な分野にはいり込んでいきつつあるわけなんで、そういう意味で大学としてのレベルを保つためにはどうしてもやらなければならない、学問的に追究しなければならないものがあるとは思うんですけれども、それと同時に教師の一人として、やはり同志社は専門教育だけをするところではなくて、人間教育をするところだということをはっきり打ち出したいと思うんです。

先ほど岡先生がおっしゃったことは、私もほんとうにそのとおりだと思います。この地球の危機といわれる時代に、ただ単に同志社の人間としてとか、あるいは日本人としてだけ考えるんじゃなくて、人類の一員として、もう少し大きな視野でものごとを見ていきたいと思うんです。そういう場合にこれから求められるものは、自分だけが生きることを考えることじゃなくて、人間がともに生きていくという、生き方の方法を学んでいくことだと思うんです。そのために私たち教師はそれぞれの専門のものを良心的に教えることはもちろん大事だと思うんです。ことに大学の場合、そのレベルを落とすことは許されません。そういう意味で、学生をちゃんと訓練していかなければならないと思いますし、そしてまた自分自身も研究を続けていかなければならないと思いますけれども、それと同時に同志社で学ぶ者はそれだけでは十分じゃないということを、教師の側も学生の側も、はっきり認識するようにしていきたいと思うんです。

中村　いままで言われた展望については、結局教師がしっかりせいということに最後は尽きてくる感じで、そのときに「はい、そんならしっかりやりましょう」と言ってしまったら、それで一つの話は終わってしまうんです。私は、そうしたらそのためにはどうしたらいいかという、さらに繰り返しみたいな問いが出てくると思うんです。そのときにはもうこれは手段がない、あとは結局同志社が、先ほどの話に戻りますけれども、それぞれ一人一人が、教員だけじゃない、職員も含めてそういう危機感をもったときに、いまおっしゃったようなことと真剣に取り組むようになってくる。そういう、最後に追い込まれたときに、それが出てくるのを待つしかしようがない。「おまえは……」と聞かれたら、私自身は精いっぱいやるとしか言いようがない。それこそ終末から出直すような気持をもってやる以外にないんじゃないかと思うんです。

遠藤　同志社におけるなかんずくキリスト教主義教育というもの、これがいままでのお話の中で、当初の理念や理想が百年を経た現在においてはかなり形骸化している。別のことばで言いますと、危機的な状況にあるということの御指摘がたびたびあったと思います。この状況をどうするかということが、つまり、これからの展望の土台になっていかなければならないわけですね。百年間たいへんけっこうでした、これからもまたしっかりやりましょうということではいけないわけでありまして、この百年の間には、先輩たちも含めまして、私ども自身も、かなり致命的な誤りをおかしたり、新島先生の当初の理念をくずしてしまったりしていることの、かなり多くあることを反省するとともに、同時に新島先生が掲げた立派な教育理念を、今日の状況で何とかして生かしていきたい。今日の社会や政治や教育の状況の中で、そして、ここまで大きく成長したけれども内容的にはかなり

空疎に水増しされている感じの強い同志社の状況の中で生かしていかなければならないという、そういう要請が私たちの前にあると思うんです。

そのためには、こういった危機的な状況にあることについて、何よりもまず、キリスト教主義教育に直接携わっている者たちが真剣に考え、取り組むことが大切であると思います。そうしますと、現在すでに日常化しておるような考え方なり、組織なり、機構なり、教育諸条件の構成や運営のしかたなりに、かなり棹さして行かねばならないことが出てこざるをえない、そういうことがあると思います。同志社の真実の教育の理念、キリスト教主義教育の理念というものを、全体の状況の中でもう一度鮮明にしていくためには、かなりいろんなことにぶつからなければならないだろうということ。これはまあ、新しい百年に向ってスタートラインに立つ場合には、相当に自覚をし、覚悟をしていかなければならぬことではないかというように思います。

人類の将来というものを考える場合にも、有賀先生がおっしゃった、人間がともに生きていける教育というものを考えるんだということですね。こういう人間像は根底的にはやはりキリスト教主義が志向するところのものだろうと思うんですけれども、そういうものを今日の状況の中で考えてみると、教師の間でも、職員の間でも、学生生徒との関係の間でも、それから経営との関係においても、さらに、校友や同窓との関係においても、理解の違いがいろいろ出てきて、ある場合には摩擦も起こり、意見の対立というようなことが生じることもあろうと思います。にもかかわらず、私たちは真実の人間形成というものを、現状況において考えていかなくちゃならない。同志社教育のいちばんの原点にしっかりと立つことを心がけて行かねばならないということを思うんです。

同志社が同志社としての重要な意思決定を行う場合、またその実行に踏み切ろうとする場合、やっぱりこの原点から常に発想するということが大事なことではないかと思うんです。ともすると、そういういちばん大切な原点的な事がらはカッコの中に入れられて、専ら経営的に、機能的に、政治的に多くのことが決定され処理されていく。キリスト教主義教育という同志社の教学と経営の基であるはずのものが、重大な時点でえてして閑却され、通り過ぎられてしまうとすれば、これはやはり危機的事態だし、みんなで心しなければいけないことでしょうね。

キリスト教主義教育の筋がいつも通され、その成果があげられやすいように、そのためのいろいろな条件の整備がなされる必要があるように思います。この意味で組織や機構に改革されるべき点がたくさんありますし、同志社はキリスト教主義教育のために金を惜しんではいけませんね。もちろん鎌谷先生がおっしゃったように、キリスト教主義の内容的充実とそのための全同志社の英知と努力の結集がぜひ必要でありますし、一人一人の意識の徹底とお互いの連帯の強化を計ることも大切なことだと思います。

全同志社人が、同志社の源流に生命の水を汲みとり、百年の歴史に学び、現在と将来への視点を正しく定め、改めるべきは大胆率直に改め、同志社でなければできない教育の成果をあげられるよう進みたいものだと、こんなことを座談会を終るにあたって感じます。

ではどうも、御協力ありがとうございました。

（一九七四年一月十二日）